

【教養教育科目】

- 1 教養教育「医学看護学研究の勧め」において、最新の研究結果および将来的な治療への応用、あるいは消化管運動の動画を織り交ぜるなど、学生が研究に興味を持てるように工夫を凝らした講義を行った。
- 2 インターフェース科目「食と健康Ⅲ」では、講義内容を理解しやすいようにするために実際に測定を行ったり、身近な例で説明するなどの工夫をした。
- 3 インターフェースにグループ学習を取り入れた。
- 4 教養講義「薬の話」では、薬物が実際にどのような場面において使用されるのか、どのような指標を基に効果判定が行われるか、など、臨床的背景に基づき解りやすい講義となるよう心掛けている。
- 5 教養教育科目として基本教養科目を新設・統合した。
- 6 「医療人キャリアデザイン」では医学部のみならず本庄の学生の受講者もあり彼らにも積極的に意見を述べさせている

【専門教育科目・講義・演習】

- 1 講義プリントの改訂、PCによる動画の採用、スライドと板書の併用
- 2 講義内容の改善のために、図書館の複数の教科書に目を通して色々な説明のやり方を勉強して、自分の説明に取り入れている。学生の理解を深めることと講義へ取り組む姿勢を改善するために、講義中に口頭で講義内容について質問をしている。今年は、学生を指名して答えさせることは行っておらず、少し考える時間を取ってから質問に対する答えを解説する。来年度は、質問に答えた学生に評価点を与えて期末試験の点数に加算する措置を考えている。
- 3 講義は最新の知見も加えた。
- 4 講義において板書の書き方に工夫をこらしてわかりやすいとの高い評価を得た。
- 5 教員と学生との双方向性の講義を意識し、適宜、質問を投げかけ自ら考えさせることを心掛けた。
- 6 講義後に行ったアンケート結果を活用し、次年度のシラバスの改良に努めた。
- 7 免疫学の講義は、教科書を指定し、しっかり学習できるように指導したほか、スライド等は新規に作成した。配付資料をさらに改善し、見やすいものにした。PBL(U7)の講義に関して、常に最先端の情報を提供すべく、スライドや配付資料の更新を行っている。
- 8 講義に関しては、スライドや配布資料の情報量を減らし、全体の流れがイメージできるように改善した。
- 9 必ず覚えておくべき内容と、記憶する必要はなく話として聞いて欲しい内容を、明確に区別して講義を行った。
- 10 講義では、分かりやすい資料の作成を試み、写真を多くして興味を持ってもらえるように努めた。
- 11 昨年度の授業評価アンケートを参考にし、いくつか改善を試みた。
- 12 前年度のアンケートや試験結果を基に、資料内容の見直しや動画等での説明を導入しより解り易くなるよう工夫した。
- 13 講義内容、資料ともにブラッシュアップし、初学者が理解しやすいように改善を図った。
- 14 それぞれの科目の特徴や取り組むべき課題を明確にすることで、医学の中での位置付けや意義を伝えるようにした。
- 15 組織学では、講義の補足となるプリントを配布し、重要項目の理解を促した。
- 16 発生学では、自作の模型を使用して講義を行い、人体形成の3次元・4次元のダイナミクスの理解を促し、質問にもできるだけ対応した。
- 17 組織学実習では、毎回スケッチ評価および可能な限り面接を行い、学生に対する指導が十分に行えるよう心がけた。
- 18 肉眼解剖学と組織学・生理学とのリンク付けのため、前期に12コマの概説講義を開講し、中間試験にて理解度・到達度を判定した。
- 19 解剖学用語を英語でもマスターさせるべく、講義資料の全面改訂を実施した。
- 20 国際認証受審に向けての準備の一環として、最終試験に於いて佐賀大学医学部医学科のモットーを出題した。
- 21 前年度において過大な負担となっていたスケッチの回数を3回に減じ、より観察力を高めるために課題内容にも一工夫加えた。
- 22 講義では一方的な授業形態を改善すべく、学生への質疑応答を講義中に心がけた。
- 23 解剖学では学生に対し、適宜、口頭試問をし、理解度を把握しながら指導をしている。
- 24 授業評価に基づいた改善について、教えるべき授業内容が多いという意見があったので、重要事項に焦点を絞って講義するよう努めた。

25	図を多く載せた授業プリントを作成し、授業中に学生が板書するのに要する時間を減らし、講義内容の理解のための時間を増やすようにした。
26	授業プリントに記載している図をCCD装置を用いて提示しながらわかりやすい講義をするようにした。
27	講義終了後、その内容を理解しているかどうかを知るための小テストを行い、学生の理解度を知りながら講義を進めた。また、この小テスト用紙に講義に対する学生の感想を書かせ、これに基づいてよりよい講義をするようにした。小テストは授業内容の復習によいと好評であった。
28	講義を実施するにあたり、図を多用した授業プリントを作成し、学生が分かりやすいように心掛けた。
29	前年と同じ内容ではなく、新しい情報を加えるなどして講義内容を常に改善するように努力した。
30	講義中にCCD装置を用いて図を多く表示し、より分かりやすい講義を行なうように心掛けた。
31	わかりやすい講義にするため、毎回の講義の目的(SB0)と内容の関連性を明確に示し、丁寧に説明した。
32	学生の興味をひきたすため、講義内容に関連する臨床例を折り込んで、より具体的な理解を得られるようにした。
33	高い講義品質を維持するため、講義アンケートを毎回おこない、その結果を次回の講義に即時にフィードバックした。
34	自己学習を促進するため、講義資料はカラー印刷し、専用のウェブページ(学内限定)でPDFファイルを配布した。
35	学生の理解をふかめるため、学生からの質問には十分な時間を割いて、マンツーマンで丁寧に回答した。
36	本試験および再試験前の質問に対しては、質問内容に加えて、本人の弱点と勉強方法を具体的に指導した。
37	毎回 講義内容をまとめたプリント(シラバス)を準備し、学生に配布した。
38	講義内容をさらに分かりやすく説明するために、スライドを作成し講義を行った。
39	講義と実習には病理学的分野の注目されている新たな知見を取り入れた
40	医学科選択コースでは、学生と1対1の質問と回答による病理学知識の獲得を目指した
41	毎年、小テスト、レポートの内容を変更している
42	講義・実習では、分かりやすい説明を心がけ、学生の質疑等に対し、丁寧に対応、指導した。
43	講義や実習では、シラバスを配布し、理解の助けを改善した。また、学生の質問には、時間外でも積極的に対応した。
44	医学科学生への講義では、病理学の用語、定義、概念を理解できるように、講義内容を吟味し、実際の講義を行った。
45	看護科学生への講義では、図を多用して病理学の理解を助けた。
46	看護科の講義では、病理学の概念、疾患の定義を日常診療や看護と関連づけ、興味を持ちやすいように内容に配慮した。
47	実際の写真や図を多く使い、印象に残るようなスライド作製を行った。
48	医学科の講義資料を改善した
49	看護学科の講義資料を改善した
50	分子細胞生物学、微生物学 講義用プリント及びスライドを学生の意見を参考に一部作り変えた。
51	講義資料はすべて毎年アップデートしている。
52	モデルコアカリキュラムの中にある男女共同参画の講義を、医学科4年時の社会医学の中に設け内容を更新した。
53	保健統計の講義では、最新の統計や法律に基づく内容を話す必要があるため、すべて更新した。
54	看護科の疫学Ⅱでは、研究計画を作成するグループワークを実施した。計画のみならず質疑応答が活発になるように1人最低1つずつは質問と回答ができるように工夫した。
55	社会医学実習と医学科選択コースでは、学生に頻繁に声をかけたり質問したりして自身で考えることを促した。
56	社会医学実習内容について、臨床現場で経験する可能性が高い社会的な問題について、解決能力の基礎となる知識の習得になる実習内容に修正した。
57	先進医療について、学生によるシナリオ作成を実施
58	講義では学生が学習に取り組みやすいように配布資料を充実させた
59	講義では学生の興味を引き出すよう考え、板書の見易さに配慮したほか画像提示も行い、わかりやすい説明を心がけた。

60	臨床医を目指す学生が多い中、法医学に興味をもたせるよう、実際に起きた事例もまじえて講義した。
61	画像教材で、大規模災害や虐待事例について講義を行った。
62	英語については、新しいテキストの開拓が十分にできた。
63	文学についても、新しい分野のテキスト開拓が存分にできた。
64	学生ラウンドを講義と組み合わせて行った。内容を改訂した。
65	講義プリントを充実させ、自己学習に向けて理解できるように工夫した。
66	講義スライドはテーマの全体像がわかるように心がけて作成した。
67	シラバスをパワーポイントなどで作成したスライド資料にしない。講義の要点を、箇条書き形式としたシラバスを作成し、講義後に復習・確認できるようにした。
68	講義はスライドを用いて講義を行っているが、スライドはできるだけ文字情報を少なくなるように心がけてはいるが、不十分であった。
69	文字情報の多いスライドとそれをそのまま読んでしまうような講義は非常にわかりにくいものとなるので以後も工夫が必要と思われた。
70	シラバスを講義で使用するスライドそのままにしないことで、より講義に集中できるようにしたが、それに慣れない学生もいたので、講義形式を事前に伝えておく必要がある。
71	ユニット3呼吸器系講義では、図表や動画を用いて学生の理解を深める工夫をした。
72	この疾患ではこのような所見であるという方向だけでなく、このような症状、検査所見の場合ほどのような疾患の可能性を考えるかといった方向からも検討できるように指導することを心がけた。
73	写真スライドや動画を用いた解説を行った。
74	医学部教育で不十分になりがちなプレゼンテーション技術を養う。
75	自分の言葉で疾患・病態を説明する機会を設ける。
76	3つの学部講義に関しては講義用のPowerPointファイル、配布資料を作成し、最新の国家試験の内容を盛り込んだり、ビデオ映像を取り込んだり、学生に興味を持ってもらうべく工夫を行った。
77	講義のプリントをアップデートした。
78	現場で必要な知識を中心に興味を持てるように配慮した。
79	できるだけ具体的に
80	わかりやすい講義内容の検討
81	学生に対して積極的なフィードバックを行った。
82	系統講義においては、心エコーの各疾患毎の実際の動画を引用するなどして、学生の興味・理解度の向上に努めた。
83	講義ではPCで行いながらも板書の感覚も取り入れ、ただ聴講するだけに終わらないように配慮した。
84	病棟での講義は、少人数の良さを生かして、担当患者から話題を発展し、その場で理解し習得できるような工夫をした。
85	講義では教育内容が多岐にわたるため、簡潔に説明した。
86	講義では、単なる疾患の羅列・説明といったなじみのない疾患では理解困難な状況に陥らぬよう、具体例を挙げ、また実際の診療現場で重要となる事項を中心に説明し、理解の一助になるよう取り組んだ。
87	シラバスや内容は毎年改訂に心がけている。
88	尿沈渣講義では実際の臨床に即すように可能なかぎり学生担当患者の検体を選定し指導した。また補完のためにもスライドの作成を行い、併せて学生に指導した。
89	新しい医学情報を取り組んだ教材の作成
90	理解しやすいように画像や動画を多く取り入れて授業を行い、シラバスも作成した。
91	講義では、積極的に数多くの症例の内視鏡写真や内視鏡検査・治療の動画を多く用いて、学生の興味を引くようにした
92	講義は一限目に具体的な到達目標を説明し、講義を行うことで学生に学習目標を明確にした。
93	講義中に症例を呈示し知識を繋がるように説明した。
94	糖尿病学の方向性がわかるように最先端のトピックをまとめて説明した。
95	過去の講義で質問があった点や、試験で回答率が悪かった点に関しては、イラストを追加するとともに説明の仕方も工夫してわかりやすく改変した。
96	最近のトピックスを毎回取り入れている。
97	肝疾患の症候学、肝癌治療について新しい知見を含めて講義を行った。

98	講義では、ポイントを押さえて説明するように心がけた。
99	講義が実習及び症例レポート作成に直結するように工夫した。
100	講義では学生の基本的学習姿勢を問い、不適切な学生にはその場で、積極的に指導を行った。
101	講義スライドの一部を改訂して、分かりやすい講義になるよう努力した。
102	実習講義および学部教育講義では、写真を図を多く取り入れたパワーポイントでのスライドを作成し、学生が興味を持つよう心掛けた。
103	講義の途中に学生への質問を入れながら、学生に考えてもらうよう工夫した。
104	授業内容で用いるスライドに、写真やシエマなどの画像をたくさん取り入れることにより、わかりやすく学生の理解を含める方針とした。
105	学習意欲を高めるため、講義内容で扱う疾患をもつ患者が、現実的にどういうことで悩んでいるか、またその治療を行うにあたり、本人や家族の環境にどういう変化が出るかなど具体例を説明した。
106	学生臨床講義は「乾癬」について臨床写真を多数用いたパワーポイントスライドでレクチャーした。
107	講義においては皮膚科特有の手術器具や手術のポイントなどに重点を置き解説した。
108	講義においては、スライドなどの資料をより実際の臨床的問題に絞り、わかりやすく興味をもてるようにした。
109	わかりやすくシラバスを改善
110	学生が眠くならないような、さらには大腸外科学の面白さが分かるような講義・PBLに努めた。
111	講義のスライドは、アニメーションや動画をうまく活用して、視覚的に興味を持ってもらいやすいように心がけている。また、最近のトピックスも盛り込むようにしている。
112	国家試験に出題されることが想定される内容を重点的に指導。
113	学生の学ぶ意識を聞きだし、適切な情報提供を行う。
114	3年生講義のスライドを校正し直した。
115	学生にも身近に感じてもらえるように具体例など提示するように努めた。
116	ビデオ供覧
117	総合ディスカッション
118	講義・実習指導においては、実臨床に基づくデータを供覧しながら興味を持たせる様に工夫した。
119	講義において動画や写真を多く用いて、視覚的にわかりやすいように工夫した。
120	スライドのシラバスを用意する
121	質問をしながら考えさせる
122	臨床の症例から生理、解剖学など基礎の分野も考えさせるように努める
123	講義においては学生が興味を持ちやすいような説明をゆっくりと語りかけるように話すように努めた。
124	画像を多用することでビジュアル世代といわれる学生に対応した。
125	動画を部分的に使用することで興味が持続しやすいようにした
126	基本的な話から最先端の話までを内容にすることで未来への展望を描きやすい内容にするように努めた。
127	講義スライドの改良
128	5年生には毎週 脊椎疾患の講義を行い重篤な疾患の鑑別および近年の国試の傾向について説明
129	OSCEの指導者講習会への参加
130	イラストを多くし学生にわかりやすいようにしている。
131	手術の画像をとりいれ実践的な講義になるようにしている。
132	講義では、大きな声ではっきりと発言するように心掛けた。
133	常に病態生理を考えるよう指導している
134	講義内容・シラバスの見直し
135	ゆっくり大きな声で発言し、スライドはイラストや動画を使用し、文字が小さくなりすぎないようにするなど工夫した。
136	講義においてはPowerPointを用いて教材作成をしているが、授業終了後には作成した講義内容すべてを公開
137	講義や実習の評価をアンケート調査および実際の聞き取り調査で確認し、講義・実習内容に反映させた。

138	心理検査に関しては実際に体験してもらったり、精神療法では実際のケースを提示することで、臨床の実際をイメージしやすいような内容になるように配慮した。
139	講義内容向上のため、知識習得に日々努めている。
140	講義では、説明内容がスムーズにいくように、導入部分を分かり易く構成し、資料の作成、配布を行い、スライドを併用した。
141	学生に対し知識だけの授業ならなよう注意し、魅力のある講義に取り組んでいる。
142	講義では学生が興味を持てるように実際の症例や画像、動画を多く取り入れるよう心がけた。
143	配布資料ではblankを作り、講義中に書き込むようにした。
144	講義はスライドを用いて視覚的に理解しやすい様に心がけた
145	スライド、ビデオ等で講義を実施。
146	講義では成人と対比した小児腎疾患の授業を展開している
147	わかりやすいスライド、シラバスを作成している
148	講義の資料・スライドにの内容を最新の知見を入れるように随時改定した。
149	できるだけ実症例のデータを盛り込み、臨床に即した教育内容になるように努めた。
150	一般講義は、昨年よりもポイントを絞って、なるべく理解しやすいように工夫・改善を繰り返しているが、年々、教えるべき内容は増加する一方であり、時間不足に悩んでいる。
151	解剖学的な位置関係などをわかりやすいように動画、写真、イラストなどを利用した
152	実際の患者さんの実例を示し、患者さんの協力を得ながら、教科書の深い理解ができるように留意した。
153	産婦人科に関する興味を持たせつつ、国家試験でよく問われる問いを意識して指導をした。
154	産婦人科診療を行う男性医師としての、利点欠点など、医学知識以外の側面についても説明するようにしている。
155	臨床的にも専門的な内容のため、できるだけ興味を持てるような内容にするように工夫している
156	3, 4年次は、臨床実習を想定し、具体的な知識、医療技術の必要性を理解させる。
157	講義は一般的な内容も取り込み、学生にもイメージしやすい内容を重視した。
158	教科書外の実臨床現場について解説を行った。
159	講義は医師国家試験の出題範囲に沿って、実際の症例写真を提示しながら授業を行った。
160	講義に動画などを使用して分かりやすい授業を心掛けた。
161	講義はできるだけ学生に興味を引いてもらうために、文字を極力減らして、インパクトのある症例写真を中心にスライドを作成した。またいかに医科と歯科（特に口腔外科疾患）が密接に関わっているのかを強調して講義を行った。
162	講義スライドを資料配布し、学習効果を高めた。
163	講義においては、理解しやすいように画像を多く用いた
164	講義の際は写真や図を使用し理解しやすいよう努めた
165	教科書の書き写しではない、具体性のあるレポートになるよう思考過程も含め、指導した。
166	講義の際は写真や図を頻用し、印象付けるよう心掛けた。
167	講義においては、前年度までのスライドを改良し、図を多く用いたスライドを作成した。
168	取りつきの悪い放射性同位元素を用いた診療について、わかりやすい講義を心がけた。
169	シラバスに工夫をこらした。
170	放射線科としてできるだけ多くの画像を紹介しようと講義のスライドに盛り込んだ
171	授業評価に基づき、わかりやすいよう講義用スライド内容の見直しを行った
172	授業評価に基づき、興味がわくよう講義用スライド内容の見直しを行った。
173	講義においては、解剖学的事項の復習や正常像の理解を深めることに重点を置くため、CT画像を用いた3D立体画像を使ったわかりやすい説明をするよう工夫した。
174	実際の画像を読影して所見を取ってみる試みを3年生の授業に導入した。
175	講義については、図解したシラバスを使用
176	輸血学については教育用DVDを独自に作成した。
177	グループ学習では、できる限り学生たちの答えを引き出すような質問やアドバイスを心がける。

178	EMPではlistening教材を取り入れる回数を増やしている。
179	講義では実際の臨床の症例を数多く提示し、教科書などの紙面のみではなかなか得ることが難しい感染症の概要が印象づけるよう取り組んでいる。
180	実臨床になら、症候に基づく感染症診断のアプローチを提示している。
181	物理学では、講義中行う卓上演示実験を今年度も新しい項目を増やした。となく医学に直結しないように見える科目では、このような取り組みは重要で学生の興味を引くことができ、満足度の向上にも寄与した。
182	講義や実習では、教科書以外にも講義資料や新たな機器を準備した。講義の流れを示して、実際の福祉機器を使って説明したり、動画での説明方法を行った。
183	講義において、アクティブラーニングの手法を多く取り入れ、講義内での測定の実施、学生の意見の発表機会の提供、外部講師の招聘と、学生との意見交換を行っている
184	長年の米国での研究・教育経験を活かし、症例や法律(HIPAAなど)、最近の研究事例を活発に議論する機会を講義中に設け、学生の学習意欲・考える力を高めるよう工夫を行った。
185	医療倫理・プロフェッショナルリズムの講義では、実際の事件や訴訟、症例を挙げ、どの時点のエラーが訴訟や患者さんの死に繋がったのか熟考、発言させるようにした。
186	メディアを用いて、座学ではあるが、より実体験に近い講義になるよう工夫をした。
187	看護学科 解剖学・生理学では、学生に配布する講義資料の改訂を行った。
188	自己学習の補助とすべく、国家試験過去問集を配布した。
189	本試験前に希望者を対象に補講を行い高評を得た。
190	医学科 組織学、細胞生物学Ⅲでは、講義およびホームページ掲載資料の改訂を行った。
191	組織学および組織学実習では、学生に対して基礎に戻った説明を、ときにはマンツーマンでおこなった。これにより、学生の理解度も高まり、学生による授業評価で高い評価を得た。
192	看護に活用できる解剖生理、病理、疾病治療として結びつけるように教育した。
193	講義内容の見直しを行い、看護実践能力の育成に繋がるよう、フィードバックを充実させた。
194	演習についても、より教員の指導が充実するように演習方法を見直した。
195	演習時の必要物品についても拡充を図り、学生の評価も良好で、看護実践能力の向上に役立った。
196	演習のレポートは、評価BCの者はAレベルに至るまで繰り返し指導し、学生の能力の向上に繋がった。
197	担当科目の教科主任として、講座内で行うミーティングの調整や提出物の管理、評価資料作成、学習要項作成などを行った。担当した講義・演習では、学生が主体的に学習に取り組むような教育方法の工夫をした。
198	講義科目において、前年度の学生授業評価、出席票に書かれた感想、および自分の授業ノートを振り返り、学生が理解しにくかった点や改善すべき点について教育内容を精選し、学生の理解が深まるように説明内容や教材を工夫した。
199	複数教員が関わる演習科目において、事前打ち合わせ、技術のデモンストレーション練習を行い、教育内容の教員間の統一を図った。また、演習後には担当者間で実施状況の確認と次年度に向けての改善点を検討した。
200	講義においては、昨年から引き続き担当する単元は、昨年の課題を踏まえ講義内容を追加、修正を行い、新たに参考書を追加して講義内容の充実を図った。
201	昨年度の演習の課題も踏まえて、演習につながる講義を模索し講義を組み立てた。
202	新たに担当した講義では、昨年度の講義内容を参考にし、かつ新たに教材研究を行い、授業案、授業資料を作成した。
203	昨年度の演習の状況を参考に、演習でおさえるべき認知領域を明らかにし、講義の組み立てを行った。
204	演習においては、講義の内容が連動できるよう、手順書のなかに認知のポイントを織り込み、学生に根拠も踏まえた援助技術の指導ができるようにした。
205	演習中に浮かび上がる疑問は、その都度担当教員と調整し、教員同士の指導が一致するよう心がけた。
206	技術チェックでは、技術のポイントを明らかにし、チェック後学生が課題が理解できるよう指導を行った。また必要時は、個別に技術の指導に対応し、技術のポイントを伝えた。
207	講義については、重要なポイントをまとめた資料を印刷物として毎回学生に配布した。
208	精神看護をイメージできるようにスライドやDVDなどを活用し視覚的に学習効果を向上させることに努めた。
209	テキストのみの内容に偏らないように適宜、教材を活用し、また学生一人一人が考える力を伸ばしていけるように、演習では事例を用いて看護過程の展開に取り組み、より現実的にケアの場をイメージできるように努めた。
210	精神看護援助論では、精神看護学実習で受け持ちやすいケースを考慮し事例を作成した。

211	知識の定着化を図るため、各授業項目が終了した後に関連問題を解かせ発表させている。その際に、看護職としての対応/考え方/法的根拠等も併せて教授している。学生の授業評価コメントから、この授業方法は好評をえていると考える。
212	講義に関しては、最新の病院における看護技術やアセスメントをもとに授業内容を工夫し、学生が実習に臨むにあたりギャップが無いように配慮した。
213	授業アンケートに基づき、継続して学生のニーズに対応した講義内容を導入した。
214	講義内容に触発された個別の求めに応じて面接を行なった。
215	臨床心理学の専門性を活かし、看護学や医学とは異なる視点からの臨床援助と教育を心がけた（例えば、緩和ケア医療に従事する専門職のメンタルヘルスや、患者－医療者関係におけるカウンセリング・マインドなど）。
216	講義では、臨床事例を活用した教材作成と具体的な解説、画像や動画を盛り込んだ講義資料の作成、実際の医療用具の提示などの臨床現場のイメージ化を促進するための工夫を継続し、学生の興味・関心を高めるよう働きかけた。
217	演習では、臨床現場にできる限り即した状況を考案し、複数の教員で看護技術演習を担当する「フィジカルアセスメントⅠ・Ⅱ」「BLS演習」、「術後の援助技術」では教員の経験年数や臨床領域の差による違いが最小限になるよう演習計画を立案し、共通認識を得て臨んだ。
218	講義・演習のなかで学生に指導する際、臨床現場の事例や看護の経験を話題に含め説明した。
219	発達看護論演習Ⅰで学生が弱い点（収集した情報からアセスメントすること）を強化できるように、作成した動画を教材として用いた。
220	各講義では、患者の体験談を交えて生活像を考えさせたため、患者の生活像がイメージできたとの意見が聞かれた。
221	グループワーク・演習の指導については、学生が主体的に学習に取り組めるように努めた。
222	演習から実習に繋げられるように、また実習から学内の講義・演習に振り返りできるように学生に想起させた。
223	講義導入時に小テストを行い、事前のアクティブラーニングを促した。
224	講義内容や演習方法について、上司らと相談しながら、より学習目標の達成に効果的なようにいくつかの科目で方法を改善した。
225	発達看護論Ⅰにおいて、高齢者の対象理解を深めるため、生活史や高齢者の価値観の理解、健康状態と高齢者が直面している発達課題の理解について強化した。
226	老年看護援助論・発達看護演習Ⅰでは、2年次、3年次と、それぞれの学生のレディネスに応じた、疾病のある高齢者とその家族のアセスメントとニーズ・看護過程について、学生が議論できる事例を作成した。
227	看護倫理講義に事例検討グループ学習を取り入れ、臨床に即した倫理的課題の解決方法を習得できるようにした。課題レポートを工夫することで、社会における医療・看護倫理に関する関心を深め、自己の考えを明確にできるようにした。
228	長寿と健康では、ロールプレイを取り入れ、より実践的な認知症高齢者への認知機能評価技術を習得できるようにした。
229	発達看護論Ⅰでは、看護過程演習において、老年看護に関する既習の知識と関連づけ、老年期特有の健康・生活課題を解決するための事例を作成した。
230	講義におけるグループワークでは、授業資料の活用や図書を提示し学生が自ら学べるような方法を示唆した。
231	母性看護学および助産学関連授業すべてにおいてアクティブラーニングを導入した。
232	助産診断技術学 演習においては、アセスメント能力を高めるために、妊娠各時期ごとに事例を用いて、それぞれ学生が、助産師、妊婦役を行った。
233	演習においてアクティブ・ラーニングの一つであるジグソー学習法を導入し、授業を工夫している。
234	講義の演習については、ジグソー学習法を取り入れ、自ら考え学べるような機会を多く設定した。また、自らが調べ、教え合いながら学習することで、自らの学びも深まり、コミュニケーション能力向上にも繋がると考える。演習時間を細かく区切ることにより、集中力が増し、時間管理についての学習にも繋がる。
235	講義でのアクティブラーニングの導入
236	地域看護診断の強化
237	担当した講義では関連した最近のトピックス（例、関西国際空港における麻疹の集団感染、エボラ出血熱等）を取り入れ、セクション毎に質問や国家試験問題を挿入し、学生の関心が継続するように工夫を行った。
238	グループワークも実施し、学生がテーマに興味を持てるようにした。
239	講義ではスライドをシラバスにして配った。実際の症例の画像を用いて、理解しやすいように提示した。

240	講義においては、専門用語と平易な言葉を並行して使用することで、より理解が深まるよう心がけた。
241	講義スライドを学生がより興味を持つような内容に変更した。
242	学生に対する指導では、学生たちの疑問に根気強く対応した。
243	講義について、特に軟部組織感染症については分類が混乱しやすいため、体型を考慮して講義した。
244	講義では、症例をもとにした議論を促している。
245	学生講義では、症例提示を行い、可能な限り実臨床に沿った形で講義を展開するよう、努力している。
246	講義では声が小さいとの指摘を受けたため、大きな声で話すように努めた結果、そのような指摘が少なくなった。
247	講義においては実践的な内容をテーマとして症候学について具体的な説明を行った。
248	6年生の病理部実習では、医療安全の講義や病理診断実習など、卒後の臨床研修で役立つ内容を盛り込んだ。
249	臨床に即役立つ知識を実例を用いて解説することで、病理と臨床の結びつきについての理解を深めた。
250	医学科シラバス改訂、講義用スライド改訂
251	学生の意見に基づいて講義資料の改訂を行った。
252	リハビリテーション医療の幅広い領域と内容について理解や興味を深めてもらうために具体的でわかりやすい説明の工夫を行った。
253	過去の症例をもとにリアリティのある症例呈示に努めた。
254	リハに関する講義ではロボットリハやがんリハなど最新の取り組みも紹介した。
255	講義内容を絞り、図表や写真を使ってわかりやすく説明した。
256	医薬品の薬理作用、系統別を独自にまとめた最新の表を、資料として配布し、学生の理解を容易にした。
257	できるだけインターラクティブな講義を心がけた。
258	退屈させない工夫として、アプリを用いた参加型の講義を行った
259	退屈させない工夫として、実際の臨床薬剤の調剤などを行う参加型の講義を行った
260	学生が知りたいこと、興味がわくところ、国家試験でもよく出題される重要などところ、最新の知見に関することなどを中心に授業や講義、指導を行うことを心掛けた。

#### 【専門教育科目・実習】

1	実習は内容や説明はほぼ確立しており、大きな改善点はないが、実習を行っている学生を出来るだけ個々に観察して間違った操作を行っている学生に対してこちらから質問して、また説明を付け加えることで理解のレベルが異なる学生に対応している。
2	実習において大学院生も含めて配置してきめ細かい指導を行い高い評価を得た。
3	実習中学生に質問を頻回に投げかけることにより実習への集中力が高まるようにした。
4	親しみやすい対応を心がけ、学生の緊張を和らげ、学習効率を上げるよう取り組んだ。
5	今後の専門科目や臨床の現場で役立つ実践的な知識を与えるよう取り組んだ。
6	昨年度の課題を基に、実習・PBLともに指導方法の改善・工夫を行うことが出来た。
7	実習では、新規に設定したテーマをさらに改良し、安定した結果が出るように工夫した。また、最新の分子生物学的手法やゲノム情報に関する内容を盛り込み学生の興味を引くようにした。
8	実習に関しては、昨年よりも少し高レベルな内容も組み込み、理解の進んだ学生にも退屈にならないように工夫した。
9	免疫学実習では、すべての学生が参加できるよう、実験操作が特定の学生に偏らないように配慮しました。また、興味と関心を持ってもらうために、クイズやディスカッションを交えながら行いました。
10	特に「みる」技術を伝えることに留意して、顕微鏡実習や肉眼解剖学実習での指導を行った。
11	学生との一対一の指導を大切にして、それぞれの課題への気づきを促すように心がけた。
12	顕微鏡や脳標本の実習では、形態と機能との繋がりを常に考察する力を身に付けてもらうよう指導している。具体的には、実習中の質問に対し教員側より質問を行い学生に考える機会を与えるように心掛けている。この際、学生の理解度を確認し、理由を併せて説明することで不足した知識を補う作業を行っている。

13	組織学実習では、提出された実習スケッチに対して、誤りや不足した知識を後で自学できるよう添削を行い返却している。
14	モチベーションや理解度が低い学生には次回以降の実習で積極的に声をかけるように心掛けている。
15	実習にゆとりを持たせるため、午後の実習冒頭に実施していたプレ講義をすべて午前のコマに移動した。
16	解剖実習・骨学実習において、希望する学生に対して正規の実習時間外での指導を行った。
17	19時頃まで学生の実習指導を行っている。
18	組織学実習では…(1)既修の分子細胞生物学の内容（輸送担体や細胞接着など）につき、理解できていない学生に復習を促した。
19	(2)スケッチ添削後、誤っている箇所を赤字で示し、コメントを記入した上、復習を促した。
20	肉眼解剖学実習では…(1)実習前に、ご遺体に対する尊厳や心構えを常に持つよう、繰り返し指導した。
21	(2)スケッチの採点について、不公平のないよう採点基準を定めた。
22	(3)実習前、あるいは実習中に15分程度のミニ講義を行い、学生の興味をひくよう努めた。
23	実習では、可能な限りマンツーマンで指導をし、終了後にはグループ全体で集まって討論する時間をもうけた。この討論により実習内容の理解が深まったと好評であった。
24	実習中には常にそばで指導を行い、実習における各操作の意義を学生が理解できるように心掛けた。
25	わかりやすい実習を、極端な小人数で行えるよう、実習内容と実習器材に工夫を凝らした。
26	高い実習品質を維持するため、講義アンケートを毎回おこない、その結果を即時にフィードバックした。
27	実習内容の理解を徹底するため、実習の各ステップごとにPBL形式のディスカッションを行った。
28	自己学習を促進するため、実習書やディスカッション資料はカラー印刷し、専用のウェブページ(学内限定)でPDFファイルを配布した。
29	学生の理解をふかめるため、学生からの質問には十分な時間を割いて、可能な限り丁寧に回答した。
30	学生からはきわめて高い評価を得られ、日本生理学会大会において、この実習に関する教育講演を行った。
31	実習も時間外の実習を行った。
32	実習と講義をリンクさせ、効果的な理解を図った。
33	実習では、なるべく多くの学生の質問に答えられるよう気を配った。
34	微生物学実習では、実習内容を説明する冊子の改善を毎年おこなっている。
35	実習のまとめ、ディスカッションに時間を費やし理解を促した
36	実習の参考資料を充実させ課題への興味を促した
37	実習では、実施中に巡視して指導し、終了後にはレポートを点検し指導した。
38	実習に関しては、関連文献等の提供し、データのまとめ方、発表デザインについてこまかく指導した。
39	エコー実習、研究を取り入れた。
40	膠原病の画像診断のエコー版を整備しなおした。
41	医学科5年生病棟臨床実習において呼吸音の正常、異常についての講義、胸部X線読影の講義を行い、呼吸器学の基礎について学生指導した。また、カンファレンスや回診で学生の指導に当たった。
42	毎週月曜日新患外来にて病歴聴取、胸部X線、CT読影の指導を行った。
43	気管支鏡見学では、症例についてなぜ検査をするのか、何の情報を得たいのかなど具体的に指導してから見学させている。
44	臨床実習では、少人数ずつの回診を行い、診察技術の向上に務めた。
45	臨床実習に関しては、学生担当患者の診察法、カルテ記載法、症例提示に関して個別に指導を行い、脳卒中に関してはグループ毎に講義を行った。
46	病棟実習では、可能な限り、実際の患者さんをモデルに診察実演をするようにした。
47	平成28年に新たに腫瘍内科領域の選択コース設置の申請を実施した。平成29年度以降に学生実習開始を受け入れる予定。
48	血液細胞形態実習に、形態のみではなく臨床経過も加味してより強く印象に残るようにこころがけた。
49	5年生の臨床実習における心エコーレクチャーは、卒後研修センターにおいて、学生全員にお互いに実際のエコーを使用させ、時間をかけて丁寧に説明するように心がけている。

50	専門外来で、新患患者の問診、診察を行わせ、診断までのプロセスを自分で考えて導き出せるような指導に努めた。
51	外来実習は単なる長時間の見学を回避し、1症例のみ立ち合い患者の診断させる形式とした。
52	カンファレンスでの症例発表に加え、個人毎に課題を与え、カンファレンスで発表する機会を設けた。
53	臨床実習中でも押さえておきたい腎病理所見の基礎を学ばせた。
54	OSCE実習では事前にビデオ学習をおこなった上で、カリキュラムに則った指導を心がけた。
55	臨床実習において、学生に症例提示をさせ、症例の理解を深めるとともに発表技術の向上を図った。
56	臨床実習では多様な症例を経験できるように担当患者を振り分けた。
57	実習時にはグループ毎に効果的な診察の流れを理解するために、分担（学生ごとに）を分け、立場を交代して行うことで理解を深めるよう工夫を行った。
58	臨床実習入門では腹部診察の責任者として、腹部診察法をより理解させるためビデオも併用し講義を行った。
59	臨床実習では、学生が理解しやすいように内視鏡検査や内視鏡治療を見学させ、また専門書を説明しながら学生が理解できるまで行った
60	病棟実習はPOSを用いて症候学・鑑別診断を主体に指導した。特に糖尿病足病変については診察の実習を行った。
61	外来実習の中で問診のととり方、糖尿病の治療についても患者を通して指導した。
62	病棟実習では、糖尿病の合併症や治療目標に関して基本的な講義を行い理解を促した。
63	外来見学では各個人に応じた治療の目標設定や治療薬の選択に関して、実際の診療の場面に即して指導を行った。
64	実習における講義は病態の概念等の座学でも可能なものではなく、診断・治療に関してより実戦的なものとした。
65	指導医講習会への参加後の実習プログラムの再編
66	平成16年1月末から始まった臨床選択実習では、これまでにない新しい発想を取り入れた。つまり皮膚科の内容は最小限にとどめ、学生の興味を引き出すように努めた。
67	教員のみならず医員にも協力してもらい、全スタッフで同じ目標を掲げて指導を行った。
68	病棟実習では、患者のつけかえや外来診療を見せることで、疾患や治療に関しての教育を行い、医療の現場で働く上での常識やコミュニケーションスキルを教えた。
69	外来実習は、それぞれの疾患において医師が医学的／社会的などの目線で、何を考えながら診療しているかを説明しながら行った。
70	処置実習では患者の処置の介助を行い、軟膏塗布、包帯やガーゼ貼付など、基本的な処置方法について指導した。
71	病棟処置では見学のみならず積極的に手を動かさせた。
72	実習では、学生に具体的な学習テーマを与え、そのまとめ方やプレゼンテーションの仕方を指導するとともに、内容について評価をしながら、より学生が学習テーマに理解が深まるよう努めた。
73	臨床実習においては、朝回診時に個々に質疑応答を設けるなど、時間の許す範囲で学生と接する時間を設けた。
74	研究室実習
75	臨床実習の期間中に、マイクロサージャリーの講義・実習を行っている。顕微鏡下における剥離操作、縫合を基本としているが、手羽先や人工血管などさまざまな材料を用いて実際の手術に近い環境を実現し、より興味をもって取り組めるよう工夫している。
76	模擬患者を想定した実習トレーニングを行った。
77	受け持ち患者に関係する英文論文を読ませ、周辺知識を習得させる。
78	実習では、学生側に立った指導を心掛けた。
79	手術解説に関しては、マンツーマン指導を徹底し、単なる見学にしないよう工夫している
80	臨床実習では、手術見学の学生が退屈しないように、手術の進行状況、術野の解剖を、リアルタイムで説明した。
81	質問を織り交ぜることで、泌尿器科学により興味関心が沸くように努めた。
82	レクチャーの際は模型やモニターを使い、実際に手技をしてもらうことで、知識と手技との融合を図った。
83	オリエンテーション用のDVDや資料を作成し、臨床実習の導入がスムーズに進むようにした。
84	実習での講義に関しては、各々の担当ケースに照らし合わせながら指導をすることで体験に基づく学習になるように指導を工夫した。

85	実際の多職種とのかかわりを通し、チーム医療の重要性などを気づかせていけるように取り組んでいる。
86	病棟では小児の特性についての理解を深めるように指導した
87	5年次臨床実習について、実習内容を評価し、適宜変更を行った。
88	論理的思考を促す目的で、臨床実習の講義では対話形式で行うようにした。
89	臨床実習については、実際に休日夜間診療所に来た患者を例に挙げて指導。
90	医学科5年生に対する臨床実習全体への取り組み方や姿勢（診察のコツやカルテ記載の仕方なども含む）は、毎回好評で、実習終了後の学生アンケートでも高評価を維持している。学生にとっては、非常に印象深いレクチャーとなっている。
91	臨床実習においては、処置・顕微鏡検査など、実際に目で見る臨床実習を多く取り入れて、学生の興味を引きながら指導できるように今後も努めていきたい。
92	臨床実習において、どの診療科においても役立つ産科婦人科領域診療のポイントを教育している
93	病棟臨床実習中に産婦人科超音波（経膈含む）の特性についての講義
94	アンケート実施による病棟実習内容の改善
95	5年次は、医療チームの一員として、責任を持って患者に関われるように指導する。
96	病棟実習ではチーム回診を平日は毎日学生を交えて行い、病態生理についての指導や管理方法について指導した。
97	外来実習では患者呼び入れ前に患者の病態をサマライズし、診療の手順を指導した。
98	臨床実習では患者に対してどのようなコミュニケーションをとるのがよいか重点的に指導した。
99	実習では、専門的な内容を分かりやすく説明した。多くの質問に対して丁寧に解説した。
100	臨床実習では豚眼を用いた手術実習に関して、5年生全員に実際の手術を体験させた。
101	PowerPointを用いた臨床実習の学習資料内容の充実を行った。
102	臨床実習においては、外来診察を中心に、問診の聴取や実際の診察を指導した。
103	学生を積極的に手術助手として参加させた。
104	外来で模型や図表、実際の超音波検査を呈示しながら指導を行った。
105	臨床実習では、頸部エコーを医学生同士で行ってもらい、解剖の学習、エコーの利点などについて理解を深めてもらえる様実習を行った。
106	週3回の外来では、紹介患者様、再来患者様を担当している。外来実習では、問診から診察、診断まで流れを理解し、鑑別や検査の意義についての理解を深めてもらうよう説明を心がけた。
107	臨床実習では、実際に生徒に実技を行わせ、その理由について問いかけることで、生徒における理解を深め、手技の習得を確実なものにするよう努めた。
108	ペイン外来での実習時には各種模型を使ってブロックの手技を分かりやすく説明した。痛みという個々の体験を扱う診療科としての難しさや面白さを伝えるようにした。
109	手術麻酔では、前日の麻酔計画の立案を指導し、実際当日に患者に麻酔を行う際に、その都度説明、指導をするようにした。
110	ペインクリニック外来では、一般的なペインクリニックの疾患から治療法を口頭で指導し、実際の外来患者が来院した場合には、一緒に診察を行った。
111	実習の指導は講義スライドを新しいものに作り替え使用した。
112	できるだけ多くの学生と長い時間接するように努め、個々の学生の到達度に合わせた指導を行った。
113	統括試験用の画像問題は新しいものに変更した。
114	実習での講義に国試の問題も取り入れている
115	実習中の放射線検査時の手技をなるべく行わせている
116	臨床実習においてはマンツーマンで読影の実際を教えた。
117	実習では、積極的に学生に話しかけ教育した。
118	CT室の見学時に、造影剤問診事項の重要性を解説することで、将来医師として働く際に主治医として行うべきことの重要性を認識してもらうようにした。
119	実習時のレクチャーにおいても、正常像を深く理解することを主眼に、病変の発見につながるアドバイスを行うよう努めた。
120	臨床実習では、新しい試みとしてReverse CPCを行っている。また、知識習得のチェックとしてe-learning用テスト形式を実施。
121	毎年、内容をUP TO DATEしたスライドを使用しての臨床講義 (Unit11)

122	臨床実習中の講義では臨床の内容を盛り込んだ実践型講義を目標とし実施
123	6年次感染症実習においては感染症や抗菌薬、感染対策に関する基礎的講義を行い、毎日診療を通して、臨床現場でも活用できるような知識の獲得を目標としている。
124	6年次感染症実習においては感染症や抗菌薬、感染対策に関する基礎的指導を行い、毎日診療を通して、臨床現場でも活用できるような知識の獲得を目標としている。また、薬物体内動態に関する講義を行っている。
125	実習では、新たな福祉機器を増やし、説明文書と解説方法を改善した。
126	実習において、医学部内実験室での実習のほか、農学部アグリセンターでのフィールド実習を取り入れ、ICT利活用の基本を体験させている
127	担当科目の教科主任として、実習連絡会議資料、評価資料等を作成し調整を行った。実習が円滑にいくように事前準備を整え、実習指導者と連携して実習指導を行った。学生には、実践場面を捉えた指導ができるように努めた。
128	臨地実習において、実習指導者との教育内容についての事前打ち合わせ、および学生個々の指導についての話し合いを持ち実習が効果的に行われるよう調整を行った
129	臨地実習指導において、学生の日々の学習状況を確認しながら、個別指導を行った。
130	実習においては、昨年度の課題を踏まえ、実習前から学生の学習状況を確認し、課題を明確にして臨んだ。
131	実習中は、毎日記録物を確認しコメントを記載し、学生が次の日に修正して実習に臨めるようにした。
132	必要時は、時間外に指導時間を設け、個別指導を行った。
133	実習中の技術の経験を期限を決めて確認し、実習指導者と調整しできるだけ学生が経験できるようにした。
134	カンファレンスでは、学生だけでなく、実習指導者とも内容の調整し、学びの多いカンファレンスになるようにした。
135	精神看護学分野の教員及び実習指導者との連携は常に念頭に置き、学生の臨地実習が円滑に行えるよう取り組んだ。
136	精神看護学実習においては、実習開始前に学生へのオリエンテーション、前年度の実習内容を基にガイダンスの作成と修正、看護部及び実習指導者と事前に打ち合わせや確認を行い、学生が円滑に実習が行えるように取り組んだ。
137	実習においても、講義内容と乖離がないよう、講義で用いた資料を活用して指導を行った。
138	統合実習参加者に、ドクターヘリでの研修を経験させた。
139	看護英会話能力の向上を目指した教育を統合実習に盛り込んだ。
140	START式トリアージの教育を災害看護の講義に導入して、教育による介入研究の成果を紹介した。
141	成人看護学実習では、学生の目標を達成するために実習グループ人数の調整と新たに実習病棟を開拓した
142	臨地実習では、病棟師長や実習指導者との連携を図り、個々の学生の状況に柔軟に対応した。変化が大きい手術後患者の患者の身体的・精神的状態の理解が容易となるよう、講義内容と関連させてポイントを絞った丁寧な指導を心掛けた。
143	臨地実習では、実習の目標・方法や学生個々の特徴・課題などを師長や実習指導者と共有し、学生が各実習の目標に達成できるよう指導・調整をおこなった。
144	統合実習では、病棟に行く前に学生がとくに学びたい内容に関する学習会を設けた。そのため、実習中に学習内容を深めることができた。
145	成人看護実習では、これまでに学習してきたことの活用方法や、思考過程が強化できるように学生のアセスメントに対する指導を強化した。その結果、学習方法の習得や、学生自身が行ったケアの意味付けにつながった。
146	実習では、学生の思考過程と看護技術のスキル向上のため、臨床実習指導者との調整を行った。
147	上司や他の教員らと相談しながら、成人看護実習に向けた学生の準備として、看護技術プラクティス(夏季セミナー)の方法や実習前の事前学習の提示方法を変え、実習に向けた効果的な学習ができるように改善した。
148	老年看護実習では、実習最終日の学内カンファレンスに、臨地実習指導者の参加を依頼し、ほとんどの施設から参加が得られた。臨地実習指導者参加が得られたことで、学生の学びを深める成果が得られ、参加者の評価も高かった。
149	実習においては、臨地における学びと学問が結びつくような学習の方法を学内の時間を利用し提案した。
150	助産学実習 I では、住民の協力を得て実践的な健康教育の機会を設けた。
151	母性看護学実習では、目標達成のための行動改善ツールを導入した。

152	分娩介助表評価表について、昨年履修した学生や教員、臨地実習指導者からの意見を基に修正した。続けて、今年度の学生に分娩評価表を演習から活用し、評価基準や曖昧な表現等に関する意見や指導者からの意見と追加し、修正した。
153	実習前に学生が「母性看護実習における課題と目標」を明確にできるようKPTAを導入した。
154	学生が担当する患者の情報を整理するために記録物を変更した。
155	実習まとめのカンファレンスにおいて、学生それぞれが「母性看護実習における目標の評価」を行うことができるように内容を変更した。
156	助産実習において、学生が実習前から他施設での分娩介助をシミュレーションできるようDVDを作成した。
157	母性看護実習において、学習準備と行動を分析するKPTAを使用し、学生自身が実習目標を達成できるような準備を導入した。
158	NICU看護に関連した演習項目（ディベロップメンタルケア）と実習の連続性を強化した。
159	実習では、Eラーニングを活用し、スムーズに伝達できるようにした。
160	整理しやすいように、記録内容をまとめる等、一部変更した。
161	看護ケアを可視化しやすいようにケアの意味づけを実施し、理解しやすい環境整備に努めた。
162	麻酔シュミレーターや、薬物血中濃度シュミレーターなどを活用した
163	集中治療部における学生実習について、医療機器のモデルや実機などを活用した
164	実習では実際の症例のCT、MRI画像を用いて、正常画像解剖、異常所見、レポート作成のポイントをわかりやすく解説した。
165	実習中の講義においては、学生担当として、学生への意識付けを考え、双方向性のdiscussion形式をとっている。
166	on the job trainingとして、症例に応じた知識について、overviewを行っている。
167	実臨床に基づいた症例提示、経験談を説明し、現在のガイドラインに照らし合わせ講義・説明を行った。
168	医学科5年、臨床実習グループ講義では実臨床的講義に加え、通常講義では触れることができない医学教育の受け方について、また医学が抱える様々な両面性について、ディスカッション形式で行うことにより、日ごろの学習および医師になったのちの自己学習、教育に関して触れる機会を与えるよう努力している。
169	手術麻酔計画、および救急外来での学生指導では、十分な通常の指導に加え、あえて困難な課題も提示、説明し、麻酔科、あるいは救急科でどのような医療を展開しているか、わずかでも気づけるように説明している。
170	実習では臨床実習での体験の振り返りとともに、グループワークを行い、好評を得た。
171	実習時、全員にN. Engl. J. Medなどの英文誌を読ませ、まとめを作らせた上で発表させた。
172	クリニカルエクスポージャーではコミュニケーションスキルの重要性について説明を行い、面接後にも振り返りを行うことで各自何が問題であったかなどについて討論を行った。
173	臨床実習について、翌年以降さらに診療参加型へ変更するよう科内で取り組みを行い、実際に実施する方針となった。
174	実習ではより少人数の指導となるため、病態をより詳しく理解させるように努めた。
175	実習指導ではできるだけ学生に問診をとらせるようにし、担当した患者の病態、検査結果を自分の力で考えることができるように指導した。
176	ペイン外来では、初診患者の病歴を学生に聴取してもらい、補足事項やカルテの書き方を指導しながら、問題点や治療選択について共に検討した。
177	手術麻酔では、チーフレジデントとして、自らが麻酔を行うことがない分、ローテートした全ての学生に積極的に声をかけ、その手術における麻酔の注目点について意見を交わすことができた。
178	ICUでは、ローテート時の入室患者についての病態や、ICUでの治療戦略や入退室の基準などについて、質問を交えながら説明を行った。
179	臨床実習においては卒後教育の重要性および佐賀大学の実情においても説明を行った。
180	内視鏡実習時に手技の解説、意義等を細やかに説明した。
181	6年生のリハ選択実習では、現場での診察・リハビリ訓練を重視した。脳画像もともに議論した。
182	薬剤部での臨床実習では、多職種による医療連携の必要性について分かりやすく説明した。
183	Audience response System (ARS) を用いた心電図教育法を取り入れるなど指導法の工夫を取り入れている
184	臨床病棟実習では、できるだけ多くの臨床所見を見学し、学生が診察できるように配慮した
185	臨床外来実習では、個々の外来症例の診察が終わった度に、症例のフィードバックを行った

186	外来実習において実際の患者さんに診察前問診をしてもらい、症例に沿って現場に即した指導をした
187	超音波検査を実際の機械を使って学生同士で行わせた
188	病棟実習の学生に対し小児泌尿器検査や腎生検の予定を連絡した。また検査の間の時間を利用し患児の病歴、疾患を説明した。
189	腎疾患の病態や治療の説明中、学生が興味を持てるように質問をやり取りしながらコミュニケーションを図った。
190	まとめレポート作成時には参考文献として和文・英文の論文を紹介し、レポートに反映させた。

### 【PBL・TBL】

1	PBLは、学生の自主性を重んじつつ、活発な議論になるように配慮した。
2	PBLに関しては、確実に正しい内容、曖昧な内容、自分の考えを述べた内容、を区別して発表させることに注力した。
3	PBLでは、どんな意見でも言いやすい雰囲気を作り、学生からたくさんの考えを引き出すことができました。
4	PBLでは、これまでの経験を基にし説明や質問の回数を増やした。
5	PBLにおいては主体的な議論ができるよう配慮した。
6	PBLでは、学生が発表しやすいように気を配り、特にプレゼンについてそれぞれの学生が興味を持った事項を他の学生にも伝えるように指導した。
7	PBLチューターでは、各学生の個性を把握し、参加者全員がバランス良く学習できるよう心掛けた。また学生同士での議論が深まるように相互の質問や回答を積極的に行えるよう誘導した。
8	PBLでは、適切な介入を行うように勤めた。
9	PBLの方法論を理解させるため、グループワークの方法論と各人の役割について、具体的に指導した。
10	能率的な学習のための、資料のドキュメンテーションの方法論について、各人に具体的に指導した。
11	広い視野に立った学習を担保し、学生の興味を引き出すため、グループワークに適切に介入した。
12	答えのない問題に対する取り組みの方法論、いわゆる研究の方法論を、具体的に指導した。
13	PBLチューターとして担当したUNIT3では「薬理学」と「臨床における薬物投与」との関連性を重視した講義を行った。
14	PBLでは学生間の議論が何となく終わってしまうのを防ぐため、解剖学・生理学の復習事項やCBT・国試で問われる重要事項に関して必ず学生に質問し考えさせ、納得して次のステップへ進めるよう配慮した。
15	学生による主体ある討論への誘導と、各テーマに則し身近な例を用いた
16	わかりやすい論点への誘導
17	PBLでは学生の討論に積極的に関わり、話の展開に介入した
18	PBLチューターとしては、議論を円滑に進行できるよう、質問や適切な助言をした。
19	PBLチューターでは、実際の学会発表などのやり方を指導した
20	PBLでは、科学的な疑問点を指摘することで、科学としての医学を実践させた。
21	PBLでは社会医学関連のシナリオを改訂し、特に疫学研究の実際と統計解析について理解が深まる様に配慮した。
22	PBLでは、学生が発言しやすいように和やかな雰囲気づくりに努めた。
23	PBLシナリオを作成した
24	PBLチューターとして、学生が発言しやすい雰囲気づくり、適切な疑問の投げかけなどに取り組んだ
25	PBLシナリオは三年目となり、総括講義では検案書の書き方についても言及した。
26	PBLは班によって議論への積極性が異なるので、介入の仕方を毎回変えた。
27	TBLの教育資料の改訂を行った。試験問題、成績について解析を行い、担当教官に解析資料を配布した。
28	TBLでは事前に講義を行い学生のディスカッションの基本となるように工夫し、TBL後の講義で質問事項について解説を行い理解を深めることができるように工夫した。
29	PBLチューターでは、症例シナリオを通して、その場面をいかにリアルに学生の頭の中に描かせるかを重視し、介入した。
30	PBLチューターとして、なるべく簡単な言葉で医学知識を整理できるように促した。
31	PBLではこの症例が単一の病態で説明可能か、複数の病態が重なっているのかなど考えるよう促した。

32	TBL講義では臨床に即した内容や最新のデータによる講義を行った。
33	PBLチューターの際は学生の自主的な発言を尊重しつつも教育的なコメントを含めて積極的な介入を行った。
34	講義のビジュアル化に務めたことと、プリントを併用しつつスライドをより洗練させたことで、PBL講義の学生の評価が最も高い講義の1つとなった。
35	PBLチューター時にミニレクチャーを加えた
36	専門分野でないPBL実習の際でも興味を持てるように議論を誘導する
37	TBLの内容はシナリオ設問をとともに常に改変して新鮮さを維持した。
38	PBLでは、学生発表に対する補足を適宜行った。
39	PBL時には、学生があげた問題点以外にも視点があることなどを促し、多角的に話し合いができるように工夫した。
40	Report記載の要点等（他人に分かりやすいPPT作り等）を指導した。
41	PBLでは消化器内科専門の立場から積極的に介入を行い、PBLがスムーズに行えるようにした
42	TBLは毎年題材を変えて診察から診断・治療までを症例を通して教え、学生の自己学習能力を引き出した。
43	PBLでは、学生の活発な意見を引き出せるよう努めた。
44	講義のパワーポイントファイルの打ち出しも併せて印刷し、ユニット開始前に配布した。
45	新しい教育システムとしてTBLが導入された。これに伴い教科書を指定して購入させ、講義等での有効活用を図った。
46	TBLの課題を改訂して、新たな問題を作成した。
47	PBLにおいては学生の主体性を引き出させるが、そのままでは主旨をそれる為、ある程度の介入を必要とする。今回は過去2年を振り返り介入の仕方をやや変更した（最後に補足を項目ごとに行うなど）。
48	PBLでは、学生の討論に積極的に介入し、所見や検査に意味付けをさせながら、症例検討をすすめることができるよう心掛けた。また、症例に合わせた実臨床の場での経験をお話し、病態をイメージしやすいように努めた。
49	PBL講義において、内容理解を深める目的で例年通り術中ビデオを供覧するなど取り組みを行った。
50	3年生PBLにて、臨床での体験を交えて指導した。
51	PBLチューターとして、各自に質問し、どこまで理解できているか、どこが理解できていないのかを確認し、学習のポイントについて指導を行った。
52	PBLチューターに関しては、グループ・メンタリティを尊重することで自主的に課題に取り組めるように配慮した。
53	TBLにおいて班討議が活発になるように臨床的に様々な意見がでる課題を設定した。
54	PBLでは学生の議論を引き出すような声掛けをおこなった
55	PBL講義は学生が興味を持てるように、臨床に即した内容となるように工夫した。
56	PBLでは、疑問点として挙げた事柄を、臨床的にどのように重要かを説明して、ふたたび議論させた。
57	PBLにおける学習要項作成、シナリオ作成
58	PBLにおいて、学生の議論に干渉しないよう注意しつつ、議論が滞った場合に介入して議論を促進している
59	PBLにおいて学生の自主的な意見交換と自己学習を支援した。
60	PBLではハワイ大学方式を積極的に取り入れ、学生主体のディスカッションになるよう誘導した。
61	PBLでは、メンバー全員が話し合いに加わりやすい様な雰囲気作りや、担当分野以外の理解、全体像の把握などに留意してチューターを務めた。
62	PBLではチューターとして意欲的に学生が意見を出せる様な環境作りに努めた。
63	自分の臨床経験から疑問に思った事など、例に挙げながら、積極的に学生のディスカッションの中に問いかけるようにした。
64	PBLのシナリオに沿って実臨床の例を挙げて、モチベーションを高めるように心がけた
65	PBLでは、生徒全員が参加できるような環境を作るよう心掛けた。
66	生徒同士で議論をうまく展開させるべく発言ひとつひとつに耳を傾けながらも議論の内容が逸脱しそうな際は助言を行った。
67	学生からの質問があった場合は、ヒントを与えながら自身で調べてみるよう促したことで、PBLを円滑に進行させ学生間の理解度の向上にもつながった。

68	TBLにおいてモニターやDVDをデモンストレーションして臨床教育の動機づけを工夫した。
69	TBLにおいては視覚的に理解できるように写真を多く取り入れた
70	PBLは学生の理解度を確認するため積極的に質問等声掛けを行った。
71	PBLでは臨床現場での重要性や国家試験対策も含め、指導した。
72	PhaseIII検討部会、unit2コチエアー、シナリオ作成、問題作成に参加しPBL教育の改善に当初から取り組んでいる。
73	PBLシナリオに画像を取り入れ、画像読影実習をおこない4.7という高い評価を得ている
74	PBLでは、極力介入するように努め、積極的な意見の交換を促した。参考資料の作成・提示も行った。
75	TBLの教育法修正
76	PBLでは、指導書の着眼点を予習し、伝達すべき要点を端的に伝達するように努めた。
77	PBLチューターとしては、学生の担当する部分に加え、その中で不足している項目についての資料作成を自ら行い配布している。
78	プレゼンテーションの手法や文献引用の方法や著作権の取り扱いを具体的に示している。
79	PBLにおいては社会医学の分野であり、step1の時点でもディスカッションがなかなか進みにくかったため、シナリオの意図を俯瞰的に汲み取れるように伝えたり、区切りを入れて小括をしながら進めた。
80	PBLチューターでは、PBL学習の原則を遵守した指導を行っている。phase0, 2の不十分な学生に対して、厳しく指導を行っている。
81	PBLにおいては、実際の医療現場における設定を学生に意識させ、臨床に必要な知識に関する疑問点を多く抽出させた。
82	できるだけ、学生が理解し易いように、状況に応じて適宜助言を加えながら指導を行うように心がけた。
83	PBLチューターでは、学生の学習に積極的に介入するようにした。
84	PBLで学生が診断以外の項目にも興味をもてるよう指導した
85	PBLチューター時の指導においては臨床現場における実際の解説を行った。
86	PBLにおいて課題となる症例に関する医薬品の資料を配布した。
87	PBLチューターに際しては学生の討論・考察を引き出すために必要と思われる介入を積極的に行うよう努めた
88	TBLでは、学生が曖昧なまま素通りするところを出来るだけ補足説明した。

#### 【その他・個別指導・マネージメント等】

1	医学科生、看護学科生4年生が 選んだ教員ベスト10（医学教育分野）で11年連続ベスト 1に選ばれた。
2	チューターとして、時間外でも相談に乗り、学生からの発言が聞きやすい様な環境で話し合った。
3	学生から試験の解答の質問に対して、教授室でわかりやすく説明した
4	留年生に特別に面談指導した。
5	大学院生教育においては、国際的にも比較的評価の高い Blood Cancer Journal（インパクトファクター 4.411）に原著論文が掲載された。
6	学界発表でも、国際学会では AACR、ASHIにて、国内学会でも日本血液学会にて、大学院生が学会報告をおこなった。
7	がん教育改革として、がんプロセミナーを佐賀大学として1回主催した。がんプロ履修者の満足度も高いものであった。
8	周産期勉強会の開催とそれに対する学生の参加
9	3年・4年ともに、20名程が日本医学英語教育学会による医学英語検定試験を受験し（推奨した）、4級、3級試験においてにおいて合格者があった
10	より操作が簡易な統計解析ソフトJMPを導入して教育を行った。
11	PhaseⅢチエアマンとして検討部会を定期的に開催し、PBLの問題点の把握と解決につとめた。
12	PhaseⅢでのTBL運営のため、講習会を実施し、講義準備を共同で行った。
13	PhaseⅢの成績不振者に学習別面談、指導、補習を行った。
14	臨床実習後OSCE成績不振者にOSCEおよび医師国家試験準備の指導を行った。
15	附属病院の大規模災害対処訓練に看護学生を参加させて、効果的な災害看護教育を行った。

16	演習や実習で目標到達が難しい学生については、教科主任などと相談の上、その他の時間で追加課題を課し指導を行った。
17	PBLチューターでは、学期末に面談を行い、部活やアルバイト等の状況を把握し学業に支障が内容な環境を提案した。
18	地域志向教育の助成金を得て、産後フォーラムの運営に学生を参加させ、両親学級について学んだ。
19	eラーニングシステムを活用して学生の予習、復習をしやすくした。
20	他の教員にも学生教育におけるICT活用について支援した。
21	TPの更新を行った。
22	医学科1年生から6年生までの教育に際し、卒前・卒後教育（臨床研修、専門医研修）の切れ目ないつながりを意識し、常に、それらを関連付けて、学習者のモチベーションを高くするように心がけた。
23	PhaseⅢ検討部会世話人
24	OSCE実習では学生の緊張を解くために指導は”ほめる”ことから始めた。またグループ内での意見を出し易くするために各人に短く意見を聞いた。